

第4回学生社会意識調査

——調査結果とその分析——

The Fourth Research of Student's Social Consciousness

岩本 勲¹⁾
Isao Iwamoto

瀬島 順一郎²⁾
Junichiro Sejima

東福寺 一郎³⁾
Ichiro Tofukuji

筆者らは、1980年代の学生の社会意識を調査するために、隔年毎に大阪と三重の大学・短大生に対してアンケート調査を行い、今回で第4回目を迎えた。学生はインテリゲンチヤの卵として、最も敏感に、時にはデフォルメされ最も極端な形で社会の意識を反映するものである。この意味で学生の社会意識調査は現代社会の実相を観察するうえで興味深い材料を提供する。同時に、学生は次代の担手であるという意味で、学生の社会意識は、将来の社会を考察するうえでの一つの先行指標となるものでもある。狭く大学に問題を限っていえば、学生の社会意識を明らかにすることは、教学上での貴重な一資料を提供するものと思われる。

調査項目を選定するにあたっては、とくに学生の政治意識、読書傾向、余暇の過ごし方に問題をしばった。本来、政治と文学は、若者たちが最も深く関心を寄せ情熱を傾けてきた対象だからである。もとより、世上言われるごとく、若者の政治ばなれ、本ばなれの傾向は否定しえないとしても、なおこれらを除いて若者を語ることはできない。とくに、現在の若者の関心と興味は、多種多様になっており、彼等の意識状況を知るためには、この分野での調査が不可欠となっている。

調査項目は、経年比較を行うため、原則として毎回同じものを使った。ただし、政治意識に関しては、時々刻々変化する政治情勢に対応するため、いくつかの項目に限って、毎回さし替えた。今回は、現在国政上の重要な争点の一つとなっている、軍事費の対GNP1%問題と原子力発電問題の2項目を、新たに質問事項として設定した。

(1) 調査目的

1980年代における大学生（短大生を含む）の社会意識の経年的変化の分析。

(2) 調査項目

政治意識と余暇の過ごし方、および読書傾向。質問事項細目については後掲調査用紙参照。

(3) 調査対象

大阪産業大学(332名、以下カッコ内は人数を示す)、大阪大学(220)、大阪経済大学(87)、三重大学(187)、帝塚山短期大学(157)、三重短期大学(183)。合計1060名。内、男706名、女352名、コード不明2名。

1), 2) 大阪産業大学
3) 三重短期大学

(4) 調査方法

質問用紙による集団調査。

(5) 調査期間

1985年6月20日～7月10日。

分析についてはⅠ部が岩本、Ⅱ部のうち余暇の過ごし方が東福寺、読書傾向が瀬島の担当で行った。

調査にあたっては、帝塚山短期大学の森一貫教授、三重短期大学の山田全紀教授(当時)にご協力をいただいた。集計作業では三重短期大学の心理学ゼミナールの学生の皆さんと助手の方々に手伝っていただいた。集計処理、データ作成は三重電子計算センターにお願いした。御協力を賜ったすべての方々に対して、紙面を借りて厚くお礼申しあげたい。今回の調査に対しては、前回と同様、大阪産業大学産業研究所の特別研究費の援助を戴いた。あわせてお礼申しあげる次第である。

I 部 政治意識

(1) 政治的満足度

表Ⅰ-1 政治的満足度 (%)

	全 体			男			女		
	85年	83年	81年	85年	83年	81年	85年	83年	81年
政治的満足	14.2	9.1	8.3	13.7	10.0	10.6	15.1	6.7	6.3
どちらともいえない	38.6	31.0	32.3	35.0	28.2	26.2	45.7	37.3	38.0
政治的不満足	47.2	59.9	59.2	51.1	61.7	63.1	39.3	55.5	55.4

(80年調査は、サンプルが少なく、経年比較の資料としては不十分なので、81年調査以降のデータを使用した。以下、第Ⅰ部では同じ。)

今回の調査結果の大きな特徴の一つは、政治的満足層が目立って増加していることである。政治に対して「非常に満足」0.9%、「やや満足」13.3%、合計で14.2%となる。前2回の調査(1981、1983年)では、この層が10%未満であったことと比較すると、大きな変化である。同様に、政治的不満足層(「やや不満」37.2%、「非常に不満」10.0%)47.2%で、前2回調査より10ポイント以上も低下している。

男女別では、政治的満足層については大きな違いはないが、政治的不満足層では、女子が男子より11.8ポイント低い。女子は男子より現代政治に対して不満が少ないようだ。また、「どちらともいえない」という半ば判断停止型の回答は女子が男子を10ポイント上回っている。これら傾向は、今回に限らず、毎回の傾向とみて、さしつかえない。

大学別では、政治的満足層のトップが大阪経済大学18.4%、次が三重短期大学17.2%、政治的不満足層のトップが大阪大学54.1%、次が大阪産業大学51.3%、となっている。

(2) 政治に満足しない理由

「どちらともいえない」層も含め、日本の政治に積極的に満足していない層が表明している理由のうち圧倒的に多いのが、政治家や政党が「党利・党略や私利・私欲を追求しているだけ」

51.4%、次いで「汚職や選挙違反など不明朗なことが多い」30.9%、3位が「平和と民主主義を守る努力が払われていない」22.7%となっている。この3原因の順位は、前2回の調査と全く変わらない。だが、4位は「適切な文教政策がとられていない」となって、前2回の「物価高などで生活が楽にならない」と入れ替っている。

表 I - 2 - 1 政治的不満原因の上位3位 (%)

	全 体			男			女		
	85年	83年	81年	85年	83年	81年	85年	83年	81年
政党や政治家は党略・私利のみを追求する	51.4	54.2	48.8	53.8	53.2	52.7	46.5	56.6	45.3
汚職や選挙違反など不明朗なことが多い	30.9	32.0	41.8	29.8	28.9	36.5	33.4	39.0	46.3
平和と民主主義を守る努力が払われていない	22.7	27.5	21.1	21.4	26.0	23.6	25.1	30.9	18.7

(回答は2つを選択)

ロッキード事件に対する人々の関心が、前2回調査のときと比較すれば、今回調査時には急速に下火になっていたにもかかわらず、政治に満足しない理由として、「党利・党略、私利・私欲」が、過半数でトップを占めている。このことは、日本の政治が単にロッキード事件に限らず、常に党利・党略、私利・私欲を目的とするダーティーなものだと考えられていることを示すものであろう。

「平和、民主主義」の比率は、83年調査より4.8ポイント低下し、81年調査の水準に戻った。前回調査年の83年は、日本の平和運動が爆発的に高揚した年であって、やはりこの年は最近では例外的な年であったといえよう。

4位の入れ替わりは、恐らく一つには82年頃から顕著になり始めた物価上昇の鎮静化を反映するものであろう。消費者物価上昇率は政府統計でも、1982年度から鈍化している(表 I - 2 - 2)。85年の統計資料はまだ発表されていないが、ひきつづき低率であることはまちがいない。

表 I - 2 - 2 消費者物価上昇率 (%)

80年	81年	82年	83年	84年
7.8	4.0	2.4	1.9	2.2

男女を比較した場合、上位3位までの項目では、3回の調査とも女子の方が男子よりも汚職や選挙違反に対して敏感である。平和と民主主義に関しては、今回と前回ともに、女子が男子より関心が深いことを示している。

大学別では、上位2位までで、「党利・党略」の項目で大阪大学56.9%、三重大学56.8%、「汚職・選挙違反」の項目で三重短期大学40.3%、三重大学34.8%、「平和・民主主義」の項目で三重大学29.7%、大阪大学28.2%となっている。

「物価高などで生活が楽にならない」の項目では、大阪産業大学24.4%、帝塚山短期大学24.1%、大阪経済大学19.7%となっており、私立大学の比率が高い。逆に国公立大学では三重大学9.7%、大阪大学8.5%、三重短期大学6.0%とその比率は低い。このことは、いかに私立大学生にとって、経済負担が重いかを端的に語っているものといえる。

(3) 政治的関心度

表 I - 3 政治的関心度 (%)

	全 体			男			女		
	85年	83年	81年	85年	83年	81年	85年	83年	81年
政治的関心がある	52.9	44.5	55.7	56.9	45.7	64.6	45.2	41.8	42.0
政治的関心がない	46.1	40.9	40.5	42.2	40.6	33.4	53.7	41.8	51.7
無 効	0.9	14.6	3.8	0.8	13.8	2.1	1.1	16.4	6.5

政治的関心層(「非常に関心をもっている」5.9%、「多少関心をもっている」47.0%の合計)は52.9%で、かろうじて過半数を超している。今回は「無効」が多く、この項目での数値はかなり信頼性に欠けるので、今回と前々回(81年調査)とを比較すれば、2.8ポイントの低下となる。逆に、政治的無関心層(「あまり関心をもっていない」38.5%と「ほとんど関心をもっていない」7.6%の合計)は46.1%で、前々回よりも5.6ポイント増加している。したがって、学生の政治的関心が低下していることはまちがいない。

男女を比較すると、政治的関心層は、男子が女子よりも11.7ポイント上回っている。逆に政治的無関心層は、女子が男子を11.5ポイント上回っている。

男子だけをとり出して、81年調査と比較すれば、その変動は大きく、政治的関心層は、7.7ポイント低下している。一方、女子の政治的関心は81年調査より3.2ポイント増加している。ただし、81年調査の女子の部分で無効が6.5%出ているので、この変動に意味があるかどうか、いまのところ判断しがたい。

大学別では、政治的関心層のトップは大阪大学66.8%、次が大阪経済大学59.8%、最低が帝塚山短期大学40.1%となっている。

(4) 政治に関心をもつ理由

表 I - 4 政治に関心をもつ理由の上位3位 (%)

	全 体			男			女		
	85年	83年	81年	85年	83年	81年	85年	83年	81年
自分の生活に関係する	43.0	45.2	43.2	39.3	43.8	35.5	52.2	49.1	61.6
平和と民主主義を守るため	23.0	24.1	25.0	23.1	24.9	29.0	22.6	21.4	15.4
政治が面白いから	18.5	18.8	22.2	20.4	20.6	22.6	13.8	14.3	23.1

政治に関心をもつ理由は、「自分の生活に関係する」43.0%、「平和と民主主義を守る」23.0%、「政治が面白い」18.5%であるが、この比率・順位とも、前2回調査とほとんど変りはない。「平和と民主主義を守る」の比率が少し低下する傾向にある。とくに男子の場合、その傾向が著しく、81年調査の29.0%から今回の23.1%の間には、5.9ポイントの落差がある。逆に、女子のこの項目での比率が高まっていることが特徴である。81年調査と今回の調査の間では、7.2ポイントの上昇がみられる。このような傾向を生み出している原因については、いまのところ、はっきりとしたことはいえないが、80年代以降、女性が平和運動に積極的に参加してきていることの、一つの反映であるかもしれない。

男女を比較した場合、著しい違いは、「自分の生活に関係する」項目に示されている。女子は52.2%、男子は39.3%で、その差は12.9ポイントとなり、女子が日常の身の回りの視点から政治を見るという姿勢がよく表われている。この傾向は、毎回の調査でも確認されるところである。

大学別では、「自分の生活に関係する」項目で三重大学が52.4%、「平和と民主主義を守る」項目で大阪産業大学が28.2%、「政治が面白い」の項目で大阪大学が25.2%となって、それぞれトップを占めている。

(5) 政治に関心をもたない理由

表 I - 5 政治的無関心原因の上位 3 位 (%)

	全 体			男			女		
	85年	83年	81年	85年	83年	81年	85年	83年	81年
政治の問題はむずかしい	33.3	24.3	34.4	25.5	20.8	18.8	46.0	32.1	50.0
個人の意見は政治に何の影響も与えない	29.7	32.6	31.3	34.6	31.2	37.5	22.2	35.7	25.0
個人の生活に関係ない	12.1	16.3	9.4	11.7	16.0	12.5	12.7	17.0	6.3

政治的無関心の原因の上位 3 位は表 I - 5 のとおりであり、4 位以下は10%未満。「政治はむずかしい」層が3割台になり、83年調査との比較では1位と2位の順位が逆になった。このことは、学生の中に単純な政治的無知が広がっていることを端的に示している。ただし、男子では、1位は「個人の意見は政治に何の影響も与えない」項目がトップで34.6%、次が「政治の問題はむずかしい」25.5%となっており、「現代的政治的無関心」が支配的である。逆に、女子の場合は、トップが「政治はむずかしい」で46.0%となっている。以上のようなすべてのパターン自体は、81年調査と一致する。

大学別では、「政治の問題はむずかしい」の項目でトップが帝塚山短期大学48.9%、次が三重短期大学48.8%。これら短大の回答者が女子学生によって占められている結果である。「個人の意見は政治に何の影響も与えない」の項目でトップが大阪産業大学36.3%、次が大阪経済大学34.3%。他大学はすべて27%以下であるのに、この2大学が高率を占めていることが特徴的である。「自分の生活に関係がない」の項目では、トップが三重短期大学22.0%、次が大阪大学15.3%となっている。

(6) 支持政党率

表 I - 6 支持政党率 (%)

	全 体			男			女		
	85年	83年	81年	85年	83年	81年	85年	83年	81年
支持政党あり	17.4	19.0	18.3	19.1	20.9	22.0	13.9	14.6	15.0
支持政党なし	77.0	78.5	78.4	75.8	76.1	75.6	79.5	84.0	80.7

「支持政党あり」が、全学生の20%にも満たず、しかもこの層は全体として減少気味である。男女別では、男子の「支持政党あり」が女子よりも5.2ポイント上回っており、ここでも女性の政治的関心の低さが表わされている。

大学別では、「支持政党あり」のトップが大阪大学21.8%、次が大阪経済大学20.7%となっている。

(7) 特定政党支持率

表 I - 7 5 政党支持率 (%)

	全 体			男			女		
	85年	83年	81年	85年	83年	81年	85年	83年	81年
自 民 党	64.1	44.0	52.6	61.5	41.1	44.0	71.4	53.8	64.4
社 会 党	9.8	11.3	16.2	11.1	10.9	21.0	6.1	12.8	9.6
公 明 党	9.2	7.7	8.1	8.9	8.5	8.0	10.2	5.1	8.2
共 産 党	7.1	16.1	13.3	8.9	17.1	14.0	2.0	12.8	12.3
民 社 党	2.7	5.4	4.0	3.7	6.2	5.0	0	2.6	2.7

支持政党あり、との回答者のうち、自民党支持率は6割5分近くに迫っている。もとより、この自民党支持率は、全調査対象の学生を分母にした場合、11.1%となり、それほどの高率ではない。とはいえ、支持政党ありというそれなりに自覚した政治意識をもつ学生の中での高率の自民党支持率は、やはり注目に値する。

逆に、83年調査で2位、81年調査で3位を占めていた共産党支持率が、10%を大きく割って4位に落ちこみ、83年調査より9.0ポイント、81年調査より6.2ポイント低下している。社会党支持率は83年調査の3位から2位に上昇したが、支持率は10%を割り、83年調査より1.5ポイント、81年調査より6.4ポイント低下している。いま、共産党と社会党の支持率を合計して仮に革新支持率として計算するならば、今回は16.9%、83年調査は27.4%、81年調査は29.5%となる。したがって革新支持率は趨勢的に低下し、最近の革新支持率は81年当時よりも4割以上も低下したことになる。

中道政党では、公明党支持率が若干上向き、民社党支持率が低下し、中道支持率全体としては大きな変化はない。

83年には、参院選に比例代表制が導入されたことに伴い、小政党が乱立した。かつて新自由クラブ創設時には、一時的ではあれ学生の爆発的な支持が同党に集中したので、今回もこれら小政党へのかなりの程度の支持があるのではないかと考えていたが、結果はほとんど支持率なしに近かった。

男女別では、女子の自民党支持率が7割に達し、その当然の結果として、共産党支持率2.0%、社会党支持率6.1%と、革新政党支持率が極端に低くなっている。

大学別では、自民党支持率で三重短期大学100%、次が三重大学75.9%、社会党支持率で大阪経済大学22.2%、次が大阪大学16.7%、公明党支持率で帝塚山短期大学19.2%、次が大阪産業大学12.5%、共産党支持率で大阪産業大学12.5%、次が大阪大学10.4%、となっている。

(8) 特定政党を支持しない理由

政党を支持しない理由の3分の1は、政党が「派閥争いや党利党略に終始している」からとしている。政党というものが、本来的に派閥争いや党利党略に終始する存在であるとすれば、学生たちの態度は、政治的にはいささかナイーブなものであるともいえる。

特定政党を支持しない理由については、顕著な性差はみられない。

表 I - 8 特定政党を支持しない理由 (%)

	議会制における政党そのものに意味がない	政党の政策に大した違いがない	自分の意見や利害を代表してくれない	派閥争いや党利党略に終始している	清潔な政党がない	その他
全 体	4.8	15.0	10.3	32.4	9.9	27.7
男	5.6	14.2	11.6	33.1	9.7	25.8
女	3.2	16.4	7.9	31.1	10.4	31.1

(今回は、前2回の調査と選択肢が異なるので、これらとの比較はできなかった。)

大学別にみても顕著な特徴はない。

(9) 新聞を読む割合

表 I - 9 新聞を読む割合 (%)

	全 体			男			女		
	85年	83年	81年	85年	83年	81年	85年	83年	81年
新聞を毎日読む	77.0	72.8	75.5	78.5	73.4	75.2	73.6	71.6	75.7
新聞を毎日読まない	21.5	24.6	22.5	20.5	24.2	23.3	23.6	25.7	21.7

新聞を「毎日必ず読む」41.2%、「大体読む」35.8%の合計が77.0%で、新聞を読む率はかなり高い。前2回調査に比べても若干その率は上昇している。ただし、後掲の第Ⅱ「余暇の過ごし方」にも示されているように、学生生活において、新聞が占める割合は小さい。

性差はあまりないが、「必ず読む」だけをとれば男子43.6%に対して女子は36.1%で7.5ポイントの差がみられる。

大学別では、「毎日読む」で、大阪経済大学86.2%、大阪大学81.4%、他の大学はすべて70%台となっている。

(10) 興味をもって読む紙面

表 I - 10 一番興味をもって読む紙面の上位4位 (%)

	全 体			男			女		
	85年	83年	81年	85年	83年	81年	85年	83年	81年
ス ポ ー ツ	33.1	36.1	32.0	40.4	44.2	45.6	17.4	17.2	19.2
社 会	30.8	25.9	28.5	27.6	21.2	19.6	37.5	36.5	36.0
文 化・科 学	12.9	12.4	11.5	14.1	11.7	12.9	10.4	14.1	10.0
政 治・経 済	9.4	10.5	10.1	11.2	12.8	14.6	5.8	5.2	5.7

(女性に限れば、今回調査で「家庭・婦人」面が10.8%で3位。)

スポーツ面は3割台で、前2回調査と大差はない。社会面は3割台に乗り、前2回調査より若干上昇している。政治・経済面は1割台を割りこんでしまっている。文化・科学面はあまり変化はない。

性差は著しい。スポーツ面は、男性が40.4%に対し女性は17.4%で、その差23ポイントである。社会面は女子が37.5%に対し男子は27.6%、9.9ポイントの差となる。政治・経済面では男子11.2%に対し女子は5.7%となっている。男子はほとんど家庭・婦人面を読まないが、女

性は10.8%の比率で、上位3位を占める。以上のようなパターンは、前2回調査とほとんど同じだといってよい。

大学別では、スポーツ面で大阪産業大学47.8%、社会面で大阪経済大学42.7%、文化・科学面で大阪大学17.9%、政治・経済面で大阪大学19.0%、家庭・婦人面で三重短期大学15%と、それぞれトップを占めている。

(1) 憲法第9条に対する態度

表 I - 11 憲法第9条に対する態度 (%)

	全 体			男			女		
	85年	83年	81年	85年	83年	81年	85年	83年	81年
改定反対	55.5	62.8	58.2	55.1	61.2	57.1	56.5	66.4	59.3
どちらともいえない	32.9	25.6	28.4	31.4	25.3	25.5	35.8	26.5	31.0
改定賛成	10.6	9.7	11.9	12.5	11.9	16.3	6.5	4.9	8.0

「憲法改定反対」が6割台を割って減少し、かわって「どちらともいえない」曖昧派が3割台に乗り、「改訂賛成」は1割強となっている。「改訂反対」が83年調査より7.3ポイントも低下していることは、注意しておかなければならない。「改訂反対」と「どちらともいえない」の項目ではほとんど性差はないが、「改訂賛成」の項目では、女子は男子の半分以下となっている。

大学別では、「改定反対」で大阪産業大学44.0%、帝塚山短期大学45.2%とかなり低く、他の大学はいずれも60%台で、著しい対照を示している。「改定賛成」で大阪産業大学14.5%、三重短期大学11.1%と1割を超えた他は、すべて1割未満となっている。

(2) 自衛隊に対する態度

表 I - 12 自衛隊に対する態度 (%)

	全 体			男			女		
	85年	83年	81年	85年	83年	81年	85年	83年	81年
解散すべき	13.7	13.6	15.0	14.0	14.9	18.2	12.8	10.4	11.9
縮小すべき	9.4	32.9	23.3	10.3	28.2	18.2	7.7	43.3	28.3
現状のまま	58.3	34.7	37.8	57.4	36.9	38.2	60.5	29.9	37.2
強化すべき	8.8	9.5	13.0	11.3	11.5	17.6	3.7	4.9	8.8
わからない	9.7	8.9	10.5	6.8	7.8	7.5	15.3	11.6	13.1

自衛隊は「現状のまま」でよいとする学生が過半数を超し、6割近くに迫っていることが大きな特徴である。前2回の調査では、この項目は、いずれも4割未満であった。

「縮小すべき」が、1割を割った。83年調査より23.5ポイント、81年調査より13.9ポイント低下した。「強化すべき」という意見も若干減少気味である。こう見てくると、自衛隊に関しては、かなりの多数が現状維持派であるといえる。

目立った性差は少ないが、「強化すべき」で男子11.3%に対して女子3.7%と7.6ポイントの差がつき、「わからない」では女子が男子より8.5ポイント多い。

大学別では、いくつかの項目で若干の違いはあるが、いずれの大学でも「現状のまま」でよ

いが、60%プラスマイナス5%の範囲に収まっている。

(13) 軍事予算に対する態度

表 I-13 軍事費の対GNP比1%突破問題に対する態度 (%)

	1%突破は当然だから支持する	1%以内に抑えれば支持する	1%でも多すぎるから大幅に削るべき	ゼロにすべき	わからない
全 体	10.0	31.2	30.8	12.6	15.2
男	11.6	31.7	29.9	13.0	13.6
女	6.5	30.4	32.7	11.9	18.5

軍事費のGNP1%突破派も、軍事費ゼロ派もともに10%前後で、1%以内派と大幅削減派を合計すると6割強となる。これを、前問の「自衛隊に対する態度」と照合すると、自衛隊解散派13.7%はほぼ軍事費ゼロ派12.6%に符合し、自衛隊強化派8.8%は1%突破派10.0%にはほぼ符合し、自衛隊現状維持派58.3%と縮小派9.4%の合計が、1%以内派と軍事費大幅削減派の合計にはほぼ符合する。やや詳しく言えば、自衛隊現状維持派58.3%から1%以内派31.2%をひくと27.1%となり、これに縮小派9.4%を加えたものが、軍事費大幅削減派ということになる。したがって、自衛隊現状維持派の中にも、軍事費大幅削減派が約半分を占めているといえる。

軍事費問題に関して、全体としてあまり性差はみられないが、「1%突破」についてはのみは、男子11.6%、女子6.5%となり、また「わからない」で女子が男子を約5ポイント上回っている。

大学別では、「1%突破」で大阪大学14.1%、大阪経済大学13.8%とやや突出しており、逆に「ゼロにすべき」で三重大学が20.2%と目立っている。「1%以内」と「大幅削減」の合計で60%前後ということについては、すべての大学に共通している。

(14) 原子力発電に対する態度

表 I-14 原子力発電に対する態度 (%)

	新設・増設にも賛成	現状のままなら賛成	一切反対	わからない
全 体	35.8	33.0	9.6	20.8
男	43.8	26.8	10.8	17.8
女	20.2	45.5	7.4	26.7

原子力発電の「新增設賛成」と「現状容認」の合計で68.8%にも達し、「一切反対」は10%に満たない。原子力は「平和利用」と「安全」であるとの政府や電力会社の宣伝が、かなり効を奏していることが分る。ただし、この原子力発電問題にかぎって、「わからない」が20%にも達している。このことは、この問題をめぐって、国民の間でも学生の間でも、充分議論が尽くされず、未だ問題点が明解になっていないことを示すものである。

性差はかなり顕著に表われている。男子は原子力発電の新增設にかなり積極的賛成が多く、女子のこの割合は、男子の約半分である。ただし、「現状容認」では女子も4割を超している。「わからない」については、女子が男子を約9ポイント上回っている。

大学別では、「新增設賛成」で大阪大学45.9%でかなりの程度突出し、「一切反対」では三重

大学が15.3%に達している。

学生の政治意識を、4回の調査を通じて見た場合、いずれの項目においても毎回ほぼ同じようなパターンを示していること、そのようななかで、近年とくに学生の保守化傾向、現状満足、現状維持の傾向が目立ってきていることが特徴である。

そこで最近の学生の政治意識の概略をまとめていけば次のようにいえよう。学生の半数近くが政治に不満であるが、しかしその割合は減少し、逆に満足層がはっきりと増加している。半数の学生が政治的関心をもっているが、その比率は低下傾向を示している。政治的関心の深さを測るものとしての、新聞の政治・経済面を興味をもって読む学生の割合は、1割前後にすぎず、同様に特定政党を支持する層も2割には満たない。特定政党支持者では6割5分近くが自民党で、いわゆる革新支持者は激減して2割にはるかに満たない。憲法改定反対の学生は未だ5割以上を占めているが、その割合は徐々に低下し、反対に「どちらともいえない」という曖昧な態度をとる学生が増加しつつある。自衛隊については、現状維持派が急増し、6割近くになっている。軍事費のGNP1%突破反対派はさすがに75%を占めているが、しかしその中で現状容認派は3割を占めている。原子力発電問題は、軍事問題と不可分の問題であるにもかかわらず、学生たちは明らかにこの問題については、軍事問題に対するのとは違って、多くの学生が原容容認の態度をとっている。

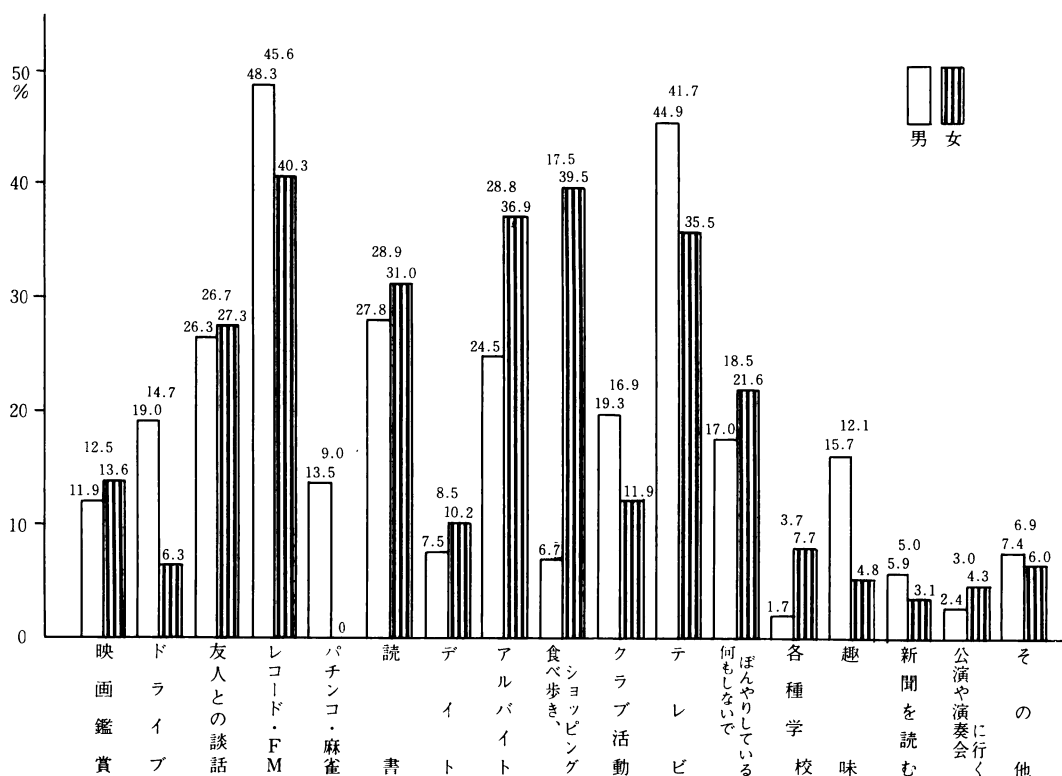
男子学生と女子学生を比較した場合、明らかに、女子学生は男子学生よりも政治的関心度も政治的不満度も低くて、自民党支持率は高いなど、現状維持ないし保守の傾向が強い。同時に多くの設問に対して「わからない」もしくは「どちらともいえない」という判断停止を示す割合が高い。女子学生が、憲法、自衛隊、軍事費等の諸問題で比較的ハト派的な傾向を示しているが、それも、どうも現状を変えないという意識に基づくところが、多いようである。

大学別では、特定の大学が特定の傾向を示す場合は、むしろ例外的であり、問題ごとに各大学の傾向はバラつくように思われる。

第Ⅱ部 余暇と読書

(1) 余暇の過ごし方

学生が余暇を主にどのように過ごしているのか、17項目の中から3つまでの選択回答を求めた(図Ⅱ-1-1)。トップは、第1回調査から続けて「レコード・FM放送を聞く」の45.6% (男48.3%、女40.3%)である。今回は男女ともその比率が伸び、従来に増して学生の高い音楽愛好度を示す結果になっている。第2位の「テレビをみる」も41.7% (男44.9%、女35.5%)と男女ともに急増している。一方、前回調査に比べ、「友人との談話」が全体で31.5%から26.7%へ、「クラブ活動」が21.6%から16.9%へ、「デートをする」が16.6%から8.5%へとそれぞれ減少傾向にある。今の学生が、余暇を友人や仲間と過ごすよりも、ひとりで過ごすことを好むようになってきているように思われる。前回第5位に落ちた「読書」が、今回は28.9% (男27.8%、女31.0%)で第3位になっていることも注目される。これまでの3回の調査を通じて下降の一途をたどっていた「読書」であったが、特に男子学生において、本離れに歯止めがかかったこととすれば、歓迎すべきである。もっとも「新聞を読む」(5.0%)が減少傾向にある点は気になる点である。



図Ⅱ-1-1 余暇の過ごし方

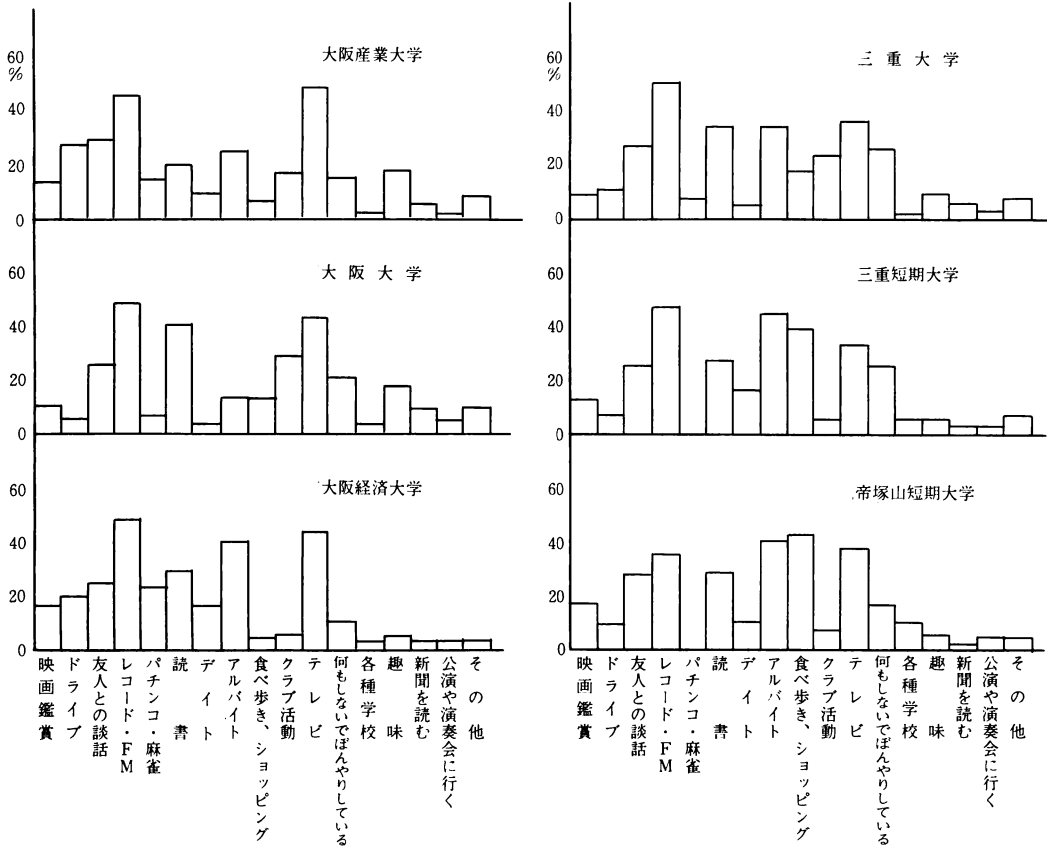
男女間で差が顕著なものを挙げると、「ドライブ」(男19.0%、女6.3%)、「パチンコ、麻雀」(男13.5%、女0%)では従来同様男子優位、「食歩き・ショッピング」(男6.7%、女39.5%)では同じく女子優位である。ただし、ドライブを愛好する女子学生は徐々に増加している。「アルバイト」の女子優位は依然として続いているが、「クラブ活動」をする比率では男女間に逆転がみられる。

大学間では、余暇の過ごし方全体の傾向には大きな差異が認められない(図Ⅱ-1-2)。三重短期大学と帝塚山短期大学は、三重短期大学の男子学生1名を除き回答者は女子学生という共通点があるため、特に類似した傾向(相関0.95)を示している。

(2) 1週間の時間の使い方

先にみたとおり、「読書」で余暇を過ごす学生は、前回と比べ増加している。読書内容については、あとの読書傾向の箇所ですでに詳しい分析がなされるが、読書に費す時間も、ことに男子学生で増加傾向にある(図Ⅱ-2)。前回の調査では、1週間のうちで読書に費す時間は、男子学生では3時間未満が最も多かった(41.6%)だが、今回は、3時間～14時間未満という回答が40.7%と最も多くなっている。なお、女子学生については、前回と大差のない結果である。

「テレビ」をみる時間は、前回同様、男女ともに3時間～14時間未満が多い(男40.5%、女



図Ⅱ-1-2 大学別余暇の過ごし方

45.2%)。前回、テレビ視聴時間が14時間を越す男子学生が半数近くいることを指摘したが、今回はその割合は減少している。前回述べたように、テレビ視聴時間と読書時間との間には、高い負の相関関係があると考えられる。

「ラジオ、レコード」を聴く時間については、男子学生の場合、前回とほぼ同じ傾向を示しているが、女子学生では、3時間～14時間未満をこれらに費すという回答率(42.3%)が目立って大きくなっている。

「クラブ活動」を行う学生が前回に比べ減少したことは先に触れたが、その傾向は、1週間のうちクラブ活動に費す時間が0時間という学生が、男女とも5割を越えたことにも表れている。さらに、クラブ活動参加者の多くが、3時間～14時間未満を活動にあてている(男24.2%、女20.2%)ことは前回と変わりはないが、全体的に、クラブ活動参加の時間は少なくなりつつある。大学別にみると、他大学に比べ、大阪大学の学生はクラブ活動参加率が高いようである。

「アルバイト」に全く従事していない学生の割合は、全体で50.9%(男56.8%、女39.5%)と、男女差を含め、前回の数値とほぼ一致している。アルバイトに従事する時間の傾向にも大きな変化はない。大学別では、三重大学と三重短期大学の学生にアルバイト従事者が多い。

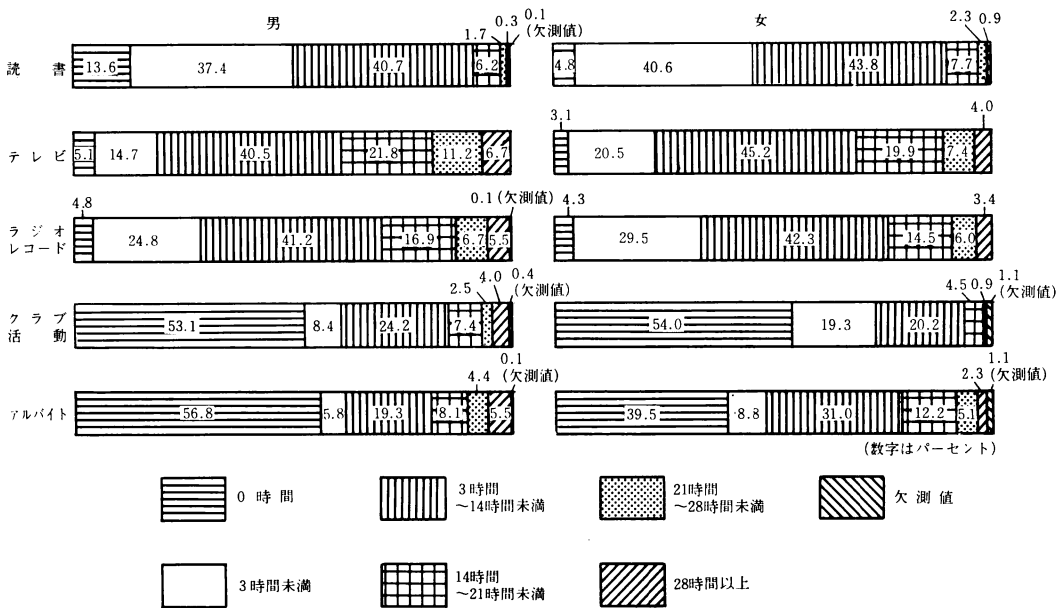


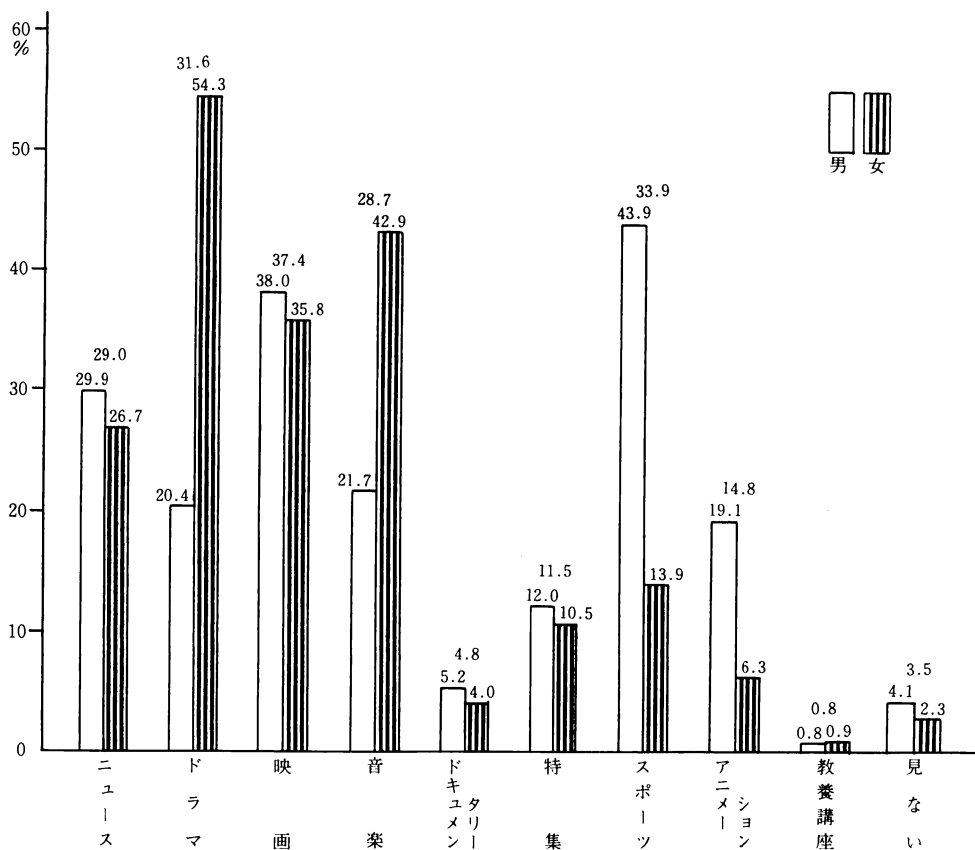
図 II - 2 1 週間の時間の使い方

(3) テレビ・ラジオ

よく見るテレビ番組については、映画(37.4%)、スポーツ(33.9%)、ドラマ(31.6%)の視聴率が相変わらず高い(図 II - 3 - 1)。映画では前回の男女差が消えた(男38.0%、女35.8%)が、ドラマについては、依然男女差が大きい(男20.4%、女54.3%)。スポーツにおいても男女差は大きく(男43.9%、女13.9%)、また、選択項目が前回の「野球」から「スポーツ」へと範囲が広がられたこともあり、回答率が男女とも伸びている。前回、男子のニュース視聴率低下傾向を指摘したが、今回は約3割の視聴率が得られ、かつ女子のそれをわずかではあるが上回る結果となっている(男29.9%、女26.7%)。逆に、前回男子の中で急増した「アニメーション」の視聴率は、今回は減少した。男子が主体性のない、受け身的なテレビ視聴態度を取りはじめていることが憂慮されると前回述べたが、ニュース視聴率の増加は、読書への回帰傾向とともに評価されてよいであろう。テレビ視聴傾向には大学間で差があり、先述した事情から、三重短期大学と帝塚山短期大学では高い相関(0.99)が得られ、他の4大学との間に大きな差異が認められた。

ラジオ番組FM放送については、前回までと同じく、男女の区別なく、ポップス(62.5%)、歌謡曲(38.6%)、特集(27.1%)の人気の高い。ことに、ポップスの人気は過去の調査を通じ急増する一方、特集は少しずつ減少している。クラシック(10.0%)やジャズ(5.6%)という伝統的なジャンルの人気も衰退の一途である(図 II - 3 - 2)。

AM放送については、これも深夜放送(37.8%)、D・J(30.0%)、リクエスト番組(22.9%)がよく聞かれており、前回と同じ結果である。聴取率の全体的傾向にもほとんど変化はみられない。FM放送を全く聞かない学生は減少し、AM放送では、逆に増加する傾向が今回も続い



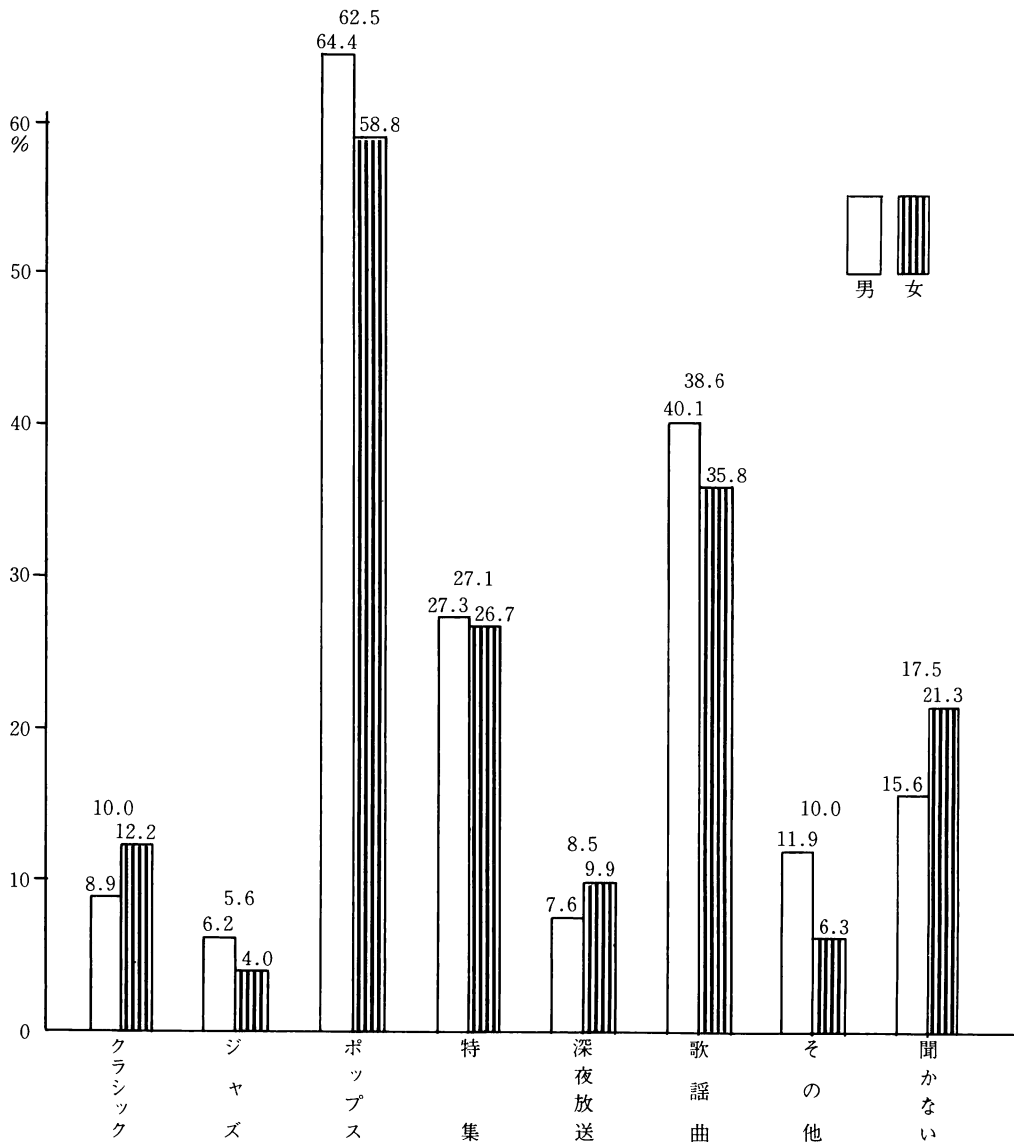
図Ⅱ-3-1 よく見るテレビ番組

ている。ラジオを全く聞かない学生が女子に多いことも従来と同様である(図Ⅱ-3-3)。

今回の余暇の過ごし方についての調査結果を全体的に見た場合、その大きな特徴は、余暇を外へ出て、あるいは友人や仲間とともに過ごすというよりも、家の中でレコードやFM放送を聞いたり、テレビを見たり、時には読書をするというようにひとりで過ごそうとする学生のライフスタイルが浮かびあがってきたことである。今後パソコン世代が大学へ進学するにつれ、こうした傾向が強まることが懸念される。

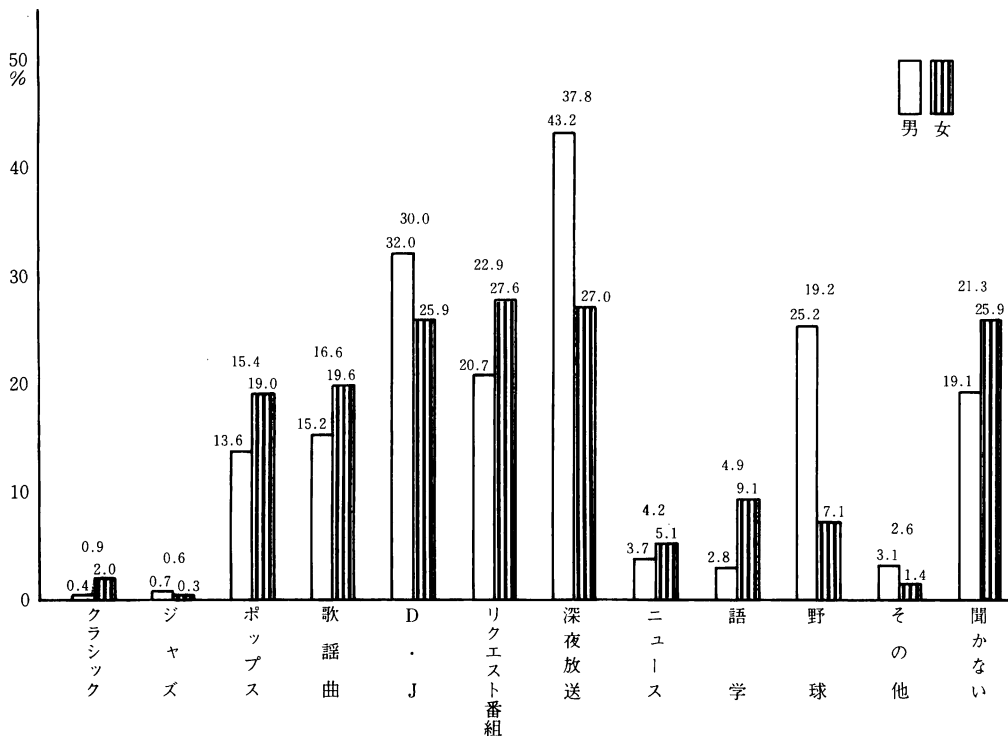
(4) 読書傾向と好きな作家

前3回の調査では学生の軽読書傾向が益々大きくなってきていることを指摘した。つまり、読書に関する情報をどこから得ているかといえば、主としてマスコミ、それもかなり広い範囲のターゲットに対して打たれたマスコミの網に学生たちがかかり易いということがわかった。コマーシャルイズムにのせられた受動的な読書傾向が浮き彫りにされる。さらに健全な意味での口コミといったようなものでなく、本のタイトルや内容を知らなかったらバカにされるといった何か小、中学校でのいじめの構造によく似た集団ヒステリーの読書が多くみられたのである。今回の調査においてもこの傾向は依然として続いているように思われる。一つに現在の日本の出版界の体質が徐々にテレビ界の体質に似てきているということが読者としての学生を益



図Ⅱ-3-2 よく聞くFM番組

々混乱させているということが原因としてあげられるであろう。テレビの世界は資本主義的悪弊を10年間の縮図にして我々に見せてくれた。今テレビ界はほとんど手のつけようのない文化の枯渇にあえいでいる状態である。今や何をやっても大衆はふり向かなくなっている。ファミコンの普及によって、小、中学生のテレビ離れは著しいといわれている。本調査でも、1週間のうちテレビを見る時間は減少傾向にある。ようやくテレビ界は淘汰期を迎えたといえるであろう。それより遅れること数年にして出版界は同じ道を辿ろうとしているように思えてならない。書店の店頭は年々、カラフルに、賑やかになる。作り出された流行作家が電波、印刷媒体を通じて寵児となり、たちまち過去の人となる。一億総タレント時代から一億総物書き



図Ⅱ-3-3 よく聞くAM番組

時代の到来かとも思えるような出版物の氾濫である。書物ほど玉と石のはっきりするものはない。さらにそれらの混淆物にはさまざまの迷彩がほどこされて出店に並び、玉も石も見分けのつかない人々を待ち受けている。石を買わされたらとんだ捨て金というものだ。しかし買った人は、文化のシンボルともいべき書物という名の商品を買うことによって多少の満足を得る。出版界の淘汰期はまだ先が見えないほど遠いのではないかという気さえしてくる。

では今回調査の分析に移ると、表Ⅱ-4-1、Ⅱ-4-2は男子、女子の読んだ本ベストテンである。男子では1位が『竜馬がゆく』、2位が『麻雀放浪記』となっているが、今年度もやはり上位は映画化されたものである。『竜馬がゆく』については前回調査(1983年)においても8位であったが、今回は「Ronin」というタイトルで映画化された影響で1位になったと思われる。『麻雀放浪記』は阿佐田哲也原作であるが、劇画と映画化という両面からの影響であろうが、劇画としての人気が4~5年来先行していたものである。最近では麻雀をする学生が減少してきているとは言うものの、コンピュータ・ゲームによる麻雀の普及が著しく、それらの影響がこの本の人気を支えたのではなかろうか。

『ころ』『人間失格』『三国志』といった本は前回もベストテン入りしているものであり、とくに『ころ』『人間失格』については、経年的調査を通じて根強い人気をもっているものである。また『人間革命』といった池田大作著の宗教的な著作が3位に入っているのも、宗教の時代を反映してのことであろうか。『宮本武蔵』については、欧米でのブームを反映して、出版

読んだ本ベストテン

表Ⅱ-4-1 男子大学生

順位	書名	度数
1	竜馬がゆく	14
2	麻雀放浪記	7
3	こころ	6
	人間革命	6
	人間失格	6
4	三國志	4
	悪魔の飽食	4
5	差別への視座	3
	宮本武蔵	3
	ビルマの立琴	3

表Ⅱ-4-2 女子大学生

順位	書名	度数
1	冤罪	13
2	こころ	10
3	吉里吉里人	5
	ひとめあなたに	5
	舞姫	5
4	女坂	4
5	項羽と劉邦	3
	窓ぎわのトットちゃん	3
	破戒	3

社のキャンペーンが盛んであったことなどが影響したものであろう。『ビルマの立琴』も、映画化によって上位に入ってきている。

女子の方は『冤罪』が1位であるが三重大に度数が偏っているために全般的な傾向とはいえない。2位は『こころ』であいかわらず根強い人気を保っており第1回、第2回の調査ともに上位に入っている。『ひとめあなたに』も『吉里吉里人』もやはり三重大に度数が偏っており、少し異なった視点からの分析が必要と思われるので後述する。3位の『舞姫』、4位の『女坂』、5位の『破戒』といったものは、いずれも古典に属するものである。しかも男子とちがって映画化されたものや、マスコミにのったものが上位に入っているというわけでもない。何故今、女子がこのような古典指向なのだろうか。少なくとも、冒頭で述べたような出版界やマスコミの戦略に男子のように踊らされてはいない。これを単に女子の保守性ととらえるか、ある種の批判ととらえるかというのは難しい問題である。従来からの傾向と考えあわせるならば、男子の軽読書化に対して女子は比較的じっくりと腰を据えて読んでいるという傾向があったが、今回もこの傾向は続いていると見るべきであろう。実際『女坂』など、円地文子の重厚な文章を読みこなすには相当な読書力が必要なのではないかと思う。今の男子学生ならおそらく避けて通るだろうことは想像にかたくない。一方、女子特有の現象として、絵と物語りが一緒になったような『なんて素敵にジャパネスク』(氷室洋子著)といった、男子学生は手にとってもみようとしないような女子学生向きの本も、一次資料では若干見られる。また、作家の項でも述べるが新井素子のような女流SF作家のものをかなり読んでいようである。つまり女子学生においては、読書というものは流行や、ファッションといったものとは別物であり、現代社会の風潮に対するセンシティブティビーは、雑誌、劇画、軽読書そしてファッションといったところで十分に発揮していると見てよいのではなかろうか。

女子の読書傾向については、大学間の差というよりも、都市間の差の方が大きいようである。つまり、三重大学、三重短期大学の女子では、度数のまとまりがあり、本のタイトルのバラエティーに乏しいという傾向がある。一方、帝塚山短大の女子、大阪大学の女子では度数のまとまりが比較的小さく、本のタイトルのバラエティーが豊富である。これらの違いは、地方都市と大都市の差つまり、人口、交通量、交通網、情報量、消費、さらに、自然風土といった

ものが作り出す地域性や住民のモデルパーソナリティーといったものによる影響であろう。これらの傾向はどちらが良い悪いの価値の問題ではなく、特質の問題としてとらえておきたい。

(5) 好きな作家

好きな作家ベストテン

表Ⅱ-5-1 男子大学生

順位	作家	度数
1	赤川次郎	47
2	筒井康隆	24
	星新一	24
3	夏目漱石	20
4	司馬遼太郎	19
5	西村京太郎	16
6	片岡義男	15
7	小松左京	13
8	遠藤周作	12
9	平井和正	9

表Ⅱ-5-2 女子大学生

順位	作家	度数
1	赤川次郎	49
2	田辺聖子	17
3	アガサ・クリスティー	12
4	夏目漱石	11
5	筒井康隆	8
6	落合恵子	7
	星新一	7
	新井素子	7
	遠藤周作	7
	太宰治	6
7	井上靖	6

表Ⅱ-5-1、Ⅱ-5-2はそれぞれ男子、女子の好きな作家ベストテンである。男子、女子ともに赤川次郎が1位を占めている。前回調査では男子の3位にランクされていただけであることを考えると、1985年はまさに赤川ブームといえそうである。現在このブームは、若年層（16才～20才）から比較的年齢の高い層（20才～25才）へとシェアを伸ばしているようであるから、当分は続きそうである。男子では、次いで筒井康隆、星新一といったSF作家が2位となっている。西村京太郎が5位にランクされている。西村ブームといわれているものは数年前からであるが、学生調査の方では初めての上位ランクであるから、少し遅れているのではないと思われる。また片岡義男が6位であるが、『スローなブギにしてくれ』以降、学生層に徐々に支持層が広がってきているのであろう。自覚的なニヒリズムも現代学生の一つの特質といえるのかも知れない。平井和正も『幻魔大戦』以降の人気を保持しているとみて良いであろう。3位の夏目漱石、7位、8位の小松左京、遠藤周作もいわば経年的本調査の常連といったところである。一次資料では、A. クリスティー、新井素子が度数7で次点にきている。

女子の方は、2位に田辺聖子がランクされており、前回調査からの根強い人気を保っているといえそうである。目新しいところでは、落合恵子、新井素子がいずれも6位である。女子の太宰好きは周知であるが、本調査でも、常に2位か3位にランクされていたものが、今回調査では7位と大幅ダウンしている。片岡義男は女子では度数5で次点となりベストテン入りはしていないが、男女ともに幅広く支持されつつある作家とみてよいであろう。また女子では三島由紀夫が同じく次点であり、男子に比べると女子によく読まれている作家である。

(6) 雑誌傾向

表Ⅱ-6-1は男子、表Ⅱ-6-2は女子の雑誌ベストテンである。上位の方は、男子では「少年ジャンプ」「少年サンデー」「少年マガジン」、女子の方は「ノンノ」「アンアン」「別冊マーガレット」である。ここ数回の調査ではほとんどこれらがベスト3を占めている。男子学生は

雑誌ベストテン

表Ⅱ-6-1 男子大学生

順位	雑誌	度数
1	少年ジャンプ	233
2	少年サンデー	164
3	少年マガジン	82
4	HOT DOG PRESS	43
5	ビッグコミックスピリッツ	37
6	ポパイ	35
7	L. マガジン	27
8	プレイボーイ	25
9	ヤング・ジャンプ	24
10	GORO	16
	Newton	16

表Ⅱ-6-2 女子大学生

順位	雑誌	度数
1	ノンノン	135
2	アンアン	61
3	別冊マーガレット	58
4	キャンキャン	32
5	オリブ	21
6	J. J.	20
7	花とゆめ	18
8	ララ	17
9	少年ジャンプ	16
10	With	14

マンガ、女子学生はアンノン族という図式はくずれていない。もっとも、今回の調査では「北斗の拳」の人氣で、男子では「少年ジャンプ」が1位、さらに女子でも、9位というランクでベストテン入りをしている。同じように一つのコミックが人氣があり、雑誌の売れ行きを伸ばしているものに、「ビッグコミックスピリッツ」がある。男子で第5位であるが、この場合、人氣コミックは「美味しんぼ」である。飽食の時代を反映してか、食の文化に対する辛口のコミックというべきか。学生層よりむしろもう少し年齢の高い層に読者を広げているようである。

4位の「HOT DOG PRESS」は今回初めてのランキングである。内容は「ポパイ」「L. マガジン」と大差はないようであるが、服装、小物、情報、女子大生の事などを中心に編集されている雑誌である。「ブルータス」の学生版といったところであろうか。「GORO」は発刊当時の編集方針を大きく変え、男子学生のための女子大学生紹介のための雑誌となっている。現代の性風俗の一端に位置するものと見るべきであろう。「ニュートン」は、理工系学生の多い大阪大学に偏りがあり、また学部によっても興味の対象となるジャンルが異なるため、詳細な分析はさけておく。

女子の方は、「ノンノ」「アンアン」という傾向以外には第4位に「キャンキャン」という比較的新しい雑誌が登場してきている。その他、「JJ」や「ララ」といった常連が顔を出している。女の子向けの雑誌のタイトルは同じ音のくり返しがよいといわれているが、確かに「キャンキャン」の例をみてもわかるように雑誌界の強固な信念にもなりそうなステレオタイプができてきているようである。

そういえばニャンニャンという言葉もかなり流行したようである。読書の項でも指摘したが、どうやら女子学生においては、読書は読書、そして雑誌はファッションという明らかな分離があるようである。

最後に、雑誌やコミックという問に対して、コミックの単行本を挙げた学生がかなりあったのでふれておく。表Ⅱ-6-3はコミック単行本のベスト4である。やはり『北斗の拳』が1位であり、『うる星やつら』、『めぞん一刻』、『タッチ』となっている。3位、4位はいずれもあだち充原作であり、前回調査でも好きな作家のところで8位にランクされているほどであり、

雑誌、単行本そしてテレビアニメとしてもかなり広い人気を集めている。誇張ではなく、これらのアニメやコミックは幼稚園生から大学生までに読者やファン層が広がっているのである。『美味しんぼ』がランクされても良いのではないかと思われたが、まったく挙げられていなかった。もっとも「ビッグコミックスピリッツ」の読者は、単行本を買うことはしないかも知れないし、先にも指摘したように学生に対しては少し辛口のコミックであるため、単行本の購買者はもっと年齢が高い層であるとも考えられる。

今回の読書調査全体をみた場合、これまでと同じく学生が受け身的な情報だけを頼りに読書をしているということが益々はっきりと指摘できる。学生は「この本が読みたい」と考えて読むのではなく、マスコミや出版界の売らんかなの商法に乗せられているようである。とりわけ男子学生がそのような傾向にあるといえるであろう。文字を読むことによって次の読書を考えるということはほとんどないのかもしれない。新聞の書評欄や、本の広告といった欄は全く見過されているのではないだろうか。一方女子学生の方は、読書に関してはかたい傾向にあり、古典的なものを好むようである。また男子学生が、流行的読書をするのに対して、女子は流行、ファッションは雑誌、そして読書は別と考えているような傾向がみられた。

表Ⅱ-6-3 コミックベスト4

順位	コミック単行本	度数
1	北 斗 の 拳	20
2	う る 星 や つ ら	8
3	め ぞ ん 一 刻	7
4	タ ッ チ	4

第4回 学生の社会意識調査票

※ 答は、すべて回答用紙に記入して下さい。

Q (1) あなたは日本の政治のありかたに満足していますか。

1. 非常に満足 2. やや満足 3. どちらともいえない 4. やや不満 5. 非常に不満

Q (3) へ

↓ Q (2) へ

Q (2) あなたが、日本の政治に満足しているといえない理由を、次のうちから2つ選んで下さい。

- | | |
|----------------------------------|--------------------------------|
| 1. 物価高などで生活が楽にならないから | 6. 公害などで快適な自然環境が保障されていないから |
| 2. 汚職や選挙違反など、不明朗なことが多いから | 7. 受験地獄が続くなど、適切な文教政策がとられていないから |
| 3. 派閥争いなど、政党の活動がみにくいから | 8. 社会福祉政策が不十分だから |
| 4. 平和と民主主義を守る努力が払われていないから | 9. その他 |
| 5. 政党や政治家が党利・党略や私利・私欲だけを追求しているから | |

↓ Q (3) へ

Q (3) あなたは、日本の政治にどの程度関心をもっていますか。

- | | | | |
|----------------|---------------|-----------------|------------------|
| 1. 非常に関心をもっている | 2. 多少関心をもっている | 3. あまり関心をもっていない | 4. ほとんど関心をもっていない |
|----------------|---------------|-----------------|------------------|

↓ Q (4) へ

↓ Q (5) へ

Q (4) あなたが、日本の政治に関心をもつ一番大きな理由を、次のうちから一つ選んで下さい。

1. 自分の生活に関係するから
2. 平和と民主主義を守るため
3. 地域社会の発展に関係するから
4. 政治家や政党の動きが面白いから
5. その他

↓ Q (6) へ

Q (5) あなたが、日本の政治に関心をもっていない一番大きな理由を、次のうちから1つ選んで下さい。

1. 自分の生活に関係がないから
2. 個人の意見は政治に何の影響も与えないから
3. 政治の問題はむつかしくてよくわからない
4. 政治に関心をむける暇がない
5. まだ選挙権がないから
6. その他

↓ Q (6) へ

Q (6) あなたには、いま支持する政党がありますか。

1. あ 2. な い

↓ (7) へ

- ↓ (8) へ

Q (7) あなたが一番支持する政党は次のうちどれですか。1つ選んで下さい。

1. 自民党
2. 社会党
3. 公明党
4. 共産党
5. 民社党
6. 新自由クラブ
7. 社会民主連合
8. 第二院クラブ
9. 無党派市民連合
10. MPD平和と民主運動
11. その他

↓ Q (9) へ

Q (8) あなたが支持する政党がない一番大きな理由を次のうちから一つ選んで下さい。

1. 議会制における政党そのものに意味がないから
2. 政党の政策に大した違いがないから
3. どの政党も自分の意見や利益を代表してくれないから
4. 政党は派閥争いや党利・党略の追求に終始しているから
5. 汚職や選挙違反などと全く関係のない清潔な政党がないから
6. その他

↓ Q (9) へ

Q (9) あなたは、憲法第9条についてどう思いますか。

1. 改定すべきである 2. どちらともいえない 3. 改定すべきではない

- Q (10) あなたは、現在の自衛隊についてどう思いますか。
 1. 解散すべきである 2. 縮小すべきである 3. 現状のままでよい
 4. もっと強化すべきである 5. わからない
- Q (11) 日本の軍事予算の対G N P比1 %突破問題について、あなたはどうか考えますか。
 1. 1 %突破は当然だから 2. 1 %以内に抑えれば 3. 1 %でも多すぎるから、軍事予算は支持する 支持する 大幅に削るべきである
 4. 軍事予算はゼロにすべきである 5. わからない
- Q (12) あなたは、原子力発電についてどう考えますか。
 1. 新設・増設にも賛成 2. 新設・増設には反対だが現状のままなら賛成 3. 一切反対 4. わからない

- Q (13) あなたは、余暇を主にどのように過していますか。次のうちから3つ選んで下さい。
 1. 映画鑑賞 2. ドライブやツーリングをする 3. 友人との談話
 4. レコードやFM放送を聞く 5. パチンコや麻雀をする 6. 読書
 7. デイトをする 8. アルバイトをする 9. 食べ歩きやショッピング
 10. クラブ活動 11. テレビを見る 12. 何もしないでぼんやりしている
 13. 各種学校（英会話・コンピュータ・その他稽古事を含む）に行く 14. 写真など趣味にうちこむ
 15. 新聞を読む 16. 公演や演奏会に行く 17. その他

- Q (14) あなたは、次のことに一週間のうち何時間を費しますか。

	0 時 間	3 時 間 未 満	3 時 間 ~ 14 時 間 未 満	14 時 間 ~ 21 時 間 未 満	21 時 間 ~ 28 時 間 未 満	28 時 間 以 上
A 読 書	1	2	3	4	5	6
B テ レ ビ	1	2	3	4	5	6
C ラジ オ ・レ コー ド	1	2	3	4	5	6
D ク ラ ブ 活 動	1	2	3	4	5	6
E ア ル バ イ ト	1	2	3	4	5	6

- Q (15) あなたはテレビやラジオのどのような番組をよく見たり聞いたりしますか。それぞれについて2つ選んで下さい。
 A テレビ 1. ニュース 2. ドラマ 3. 映 画 4. 音 楽 5. ドキュメンタリー
 6. 特 集 7. スポーツ 8. アニメーション 9. 教養講座 10. 見ない
 B ラジ オ イ FM 1. クラシック 2. ジャズ 3. ポップス 4. 特 集
 5. 深夜放送 6. 歌謡曲 7. その他 8. 聞かない
 ロ AM 1. クラシック 2. ジャズ 3. ポップス 4. 歌謡曲
 5. D・J 6. リクエスト番組 7. 深夜放送 8. ニュース
 9. 語 学 10. 野 球 11. その他 12. 聞かない

- Q (16) あなたは新聞を毎日読みますか。
 1. 必ず読む 2. 大体読む 3. あまり読まない 4. ほとんど読まない
 ↓ Q (17) へ Q (18) へ

- Q (17) あなたが一番興味をもって読む紙面はどこですか。1つ選んで下さい。
 1. 政治・経済 2. 社 会 3. スポーツ 4. 家庭・婦人
 5. 文化・科学 6. その他

↓ Q (18) へ

- Q (18) あなたが、最近読んで印象に残った本を一冊あげて下さい。

